

令和 2 年 6 月 30 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2019

課題番号：15K04225

研究課題名(和文) ケアとスピリチュアリティの教育人間学的解明 女性宗教者への聞き取り調査を中心に

研究課題名(英文) Educational-philosophical investigation of care and spirituality

研究代表者

西平 直(Nishihira, Tadashi)

京都大学・教育学研究科・教授

研究者番号：90228205

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：ケアとスピリチュアリティの関連を次世代育成の視点を中心として教育人間学的に解明した。フィールド調査はブータン王国に集中し研究が大きく進展した。合計8回の調査を行い、尼僧院調査とともに、NGO「ローデン基金」と深い協力関係を構築するに至った(今年度から新たに始まる五年間の科研課題に継続する)。またスピリチュアルケア学会においても学術大会を主催するなど継続的に活動を積み重ねた。思想研究の成果としては単著五冊(近刊含む)、共編著三冊、その他多くの研究論文を発表した。中でも『ライフサイクルの哲学』(東京大学出版会、2019年)は、教育人間学的視点からケアとスピリチュアリティの諸相を考察したものである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ケアとスピリチュアリティの問題は、教育・福祉・看護・宗教など多領域にまたがる課題であり、フィールドワークと哲学的な思想研究をかみ合わせた本研究は、多方面から関心を持たれた。成果の一旦は、数冊の著作をはじめ、学会誌などに発表され、多様な講演の機会でも発表された。例えば、転生に関して、Views of Reincarnation: the perspective of Bhutanese Youth, May, 8, 2017, Fateful and Unexpected Encounters : Researching Bhutanese Youth, October, 25, 2017など。

研究成果の概要(英文)：This project was the research of care and spirituality, composed of an action research and a philosophical investigation. 1) Action research in Bhutan: I did focus on Bhutan, visited there 8 times, could make good and deep contact with one NGO for young people, and will keep on this research in the next JSPS project (adopted for 5 year). 2) Philosophical investigation: Many books and articles are published during this 5 year. (Single author) Life-cycle Philosophy: De-familiarizing perspective, University of Tokyo Press, 2019, Insights of Keiko: Exercise and Expertise in Japanese Tradition, Syun-juu-sha, 2019, Insights of Shuyo: Self-cultivation in Japanese Traditions, Syun-juu-sha, 2020. (Co-author) Inquiries into the core of cares, (ed. with Y. Nakagawa), 2017, Dialogue of 'Mushin=No-mind-ness': Philosophy of Psychoanalysis, (collaborated with K. Matsuki), 2017, Clinical-Philosophical Pedagogy, (ed. with S. Yano), 2017.

研究分野：教育人間学

キーワード：ケア スピリチュアリティ スピリチュアルケア ブータン ライフサイクル 教育人間学

### 1. 研究開始当初の背景

スピリチュアルケア研究は、3.11 東日本大震災以降、その社会的役割を大きく転換した。ごく限られた特殊な課題に過ぎなかった研究領域が、3.11 以降の精神文化の変容の中で、社会的なニーズとなった。従来の「ケア」では担うことのできない困難、例えば「なぜ苦しまなければならないのか」という問いに、正解を出すのではない、その苦悩に寄り添う営み。その特別な位相の苦しみを和らげる営みが「スピリチュアルケア」と呼ばれるようになった。グリーンケア、ターミナルケア、災害被害者ケア、犯罪被害者ケアなど、様々な「ケア」を担うワーカーの育成が期待され始めたのである。本研究は、そうした実際上の必要に応えると共に、「スピリチュアルケア学会」(2007年発足)の学問的課題に対応するものである。

筆者は「ケア」と「スピリチュアリティ」の双方について思想研究とフィールド調査を積み重ねてきた。それらの研究を土台として、より一層具体的な課題に取り組むことを計画した。

### 2. 研究の目的

(1) 当初の目的は、ケアとスピリチュアリティの関連を、その次世代育成の視点を中心として、教育人間学的に解明することであった。

1) 「女性宗教者」への聞き取り調査(カトリック修道院、ブータン王国の尼僧)を行う。

2) スピリチュアルケア学会を中心とした「スピリチュアルケア養成課程」の調査を行う。

3) 「ケア」と「スピリチュアリティ」が重なる思想領域の哲学的な検討を行う。

以上の課題を通して、ケアとスピリチュアリティの関連を、一方では原点に遡り、他方ではアクトチュアルな現実の課題の中で、総合的に解明することを目的とした。

(2) 具体的には、以下の点を目指した。

1) 「女性宗教者への聞き取り」を通して「ケア」と「スピリチュアリティ」の結合の原風景を確認する。その際、当然、女性史研究・ジェンダー論の視点から批判的に考察することによって、問題の所在を確認する。

2) 今日の宗教間対話の思想から検討することによって、既成宗教に限定されない「スピリチュアリティ」の原風景、あるいは、その社会的な意味を確認する。

3) 海外の女性宗教者への聞き取り調査を行うのは、日本における「スピリチュアルケア養成課程」を相対化するためである。キリスト教、中でもカトリック圏、あるいは、旧東欧諸国の修道院の中で、宗教ともイデオロギーとも異なる地平の「ケア」の思想を確認する。宗教対立・イデオロギー対立を超えた、「目の前で苦しむ者へのケア」の思想、そしてそうしたケア担当者を養成する思想を浮き彫りにする。

4) 現代の諸思想や、看護学・福祉学との交流の中で、ケアと結びついた「人格的な成熟のモデル」を提案する。

5) 「スピリチュアルケア」というカタナカに代わる日本語表記を提出する。仮説的には「心と魂の苦しみに寄り添う営み」という表記を念頭に、具体的検討を重ねる中で、最終的な判断を下すことになる。

### 3. 研究の方法

研究方法は、フィールド調査(聞き取り調査)と思想研究の二本柱であった。

1) 主要なフィールド調査は、三領域を設定した。

A、日本の「スピリチュアルケア養成課程」の参与観察

B、カトリック修道院におけるシスターからの聞き取り調査

C、ブータン王国における尼僧からの聞き取り

2) 思想研究は、「ケア」と「スピリチュアリティ」に関して、以下の問題領域を設定した。

A、キリスト教圏の伝統的思想(西方カトリック教会、東方教会)の調査

B、仏教圏の伝統的思想(チベット仏教・日本仏教)の調査

C、ジェンダー論、深層心理学など現代の思想との対話

D、看護学・福祉学との対話

以下、「研究成果」に見る通り、計画通りに進んだ領域もあれば、計画通りに進まなかった領域もある。むしろ、思わぬ領域において研究が展開した。しかし、こうした流動性は、初めから織り込み済みであり、フィールド調査と思想研究の同時並行は、きわめて有効に機能したことになる。

### 4. 研究成果

(1) フィールド調査に関しては、以下のような成果を得た。

A、日本の「スピリチュアルケア養成課程」の参与観察については、「スピリチュアルケア学会」に参加する中で、多くの観察機会を得た。とりわけ、その資格認定をめぐり、状況が大きく変化

してゆく過程の議論に（理事として）参与するし、観察を深めた。ただし、この件は、問題が複雑に変化するため、研究成果としてまとめることはできなかった。

B、カトリック修道院におけるシスターからの聞き取り調査については、予定通りには進まなかった。その最大の要因は、シスターたちの高齢化である。聞き取りを予定していたレデンブトリスチン女子修道院のシスターたちが、高齢のため体調を崩され、入院を余儀なくされ、また、修道院への滞在事態も遠慮する方が望ましいと判断されることになった。他の修道院を探すことも考えたが、以下に見る通り、ブータン調査が、予定以上に豊かに展開したため、早い段階から、この点については、研究を取りやめることにした。また、旧東欧諸国の修道院における「女性宗教者」への聞き取りは、先方との連絡がうまくゆかず、調査を断念せざるを得なかった。

C、ブータン王国における尼僧からの聞き取りは、予定通り、合計8回、実施することができた。尼僧の増加については、様々な見解があり、現時点では結論的な見解を出すことができなかった。その代わりに、尼僧院が、僧院制度全体、さらには、ブータン社会全体の動向と密接に連動しながら、日々変化していることは確認された。例えば、ブータンの伝統行事の中に、隠れた形で「ケア」の精神が潜んでいる可能性が高い。「コンパッション（慈悲・悲しみ）」の視点、あるいは、「生きとし生けるものを身内とする感覚」。ブータンの伝統文化における「ケアとスピリチュアリティ」が課題となり、その延長上に、ブータン社会全体の調査が必要となってきた。

## （2）ブータン調査について

そこで、ブータン調査について詳しく報告しておく。尼僧院調査を中心に計画したブータン調査が、思いもよらぬ展開を見せ、極めて貴重なネットワークを形成するに至り、興味深い研究成果が得られた。

尼僧院は、ブータン社会全体の構造と複雑に関連している。とりわけ、若者たちの人生観との関連が強い。その関連で、ブータンの若者たちの「スピリチュアリティ」が研究課題となり、高校生を中心に「宗教観」、あるいは「宗教者イメージ」について聞き取り調査を実施した。転生の思想に注目した調査も試みたが、この点については十分な成果は得られず、むしろ方法的な課題が浮かび上がってきた。さらには、GNHの中心理念の一つ「環境の持続可能性」と「スピリチュアリティ」との関連が重要な課題として浮上した。

また、ブータンのNPOと深い信頼関係を得た。ブータン初のNPO「ローデン基金 Loden Foundation」であり、奨学金支援・アントレプレナー支援・文化保護を次世代支援として統合的に行い、ブータン社会の中で大いに期待されている。創設者は、カルマ博士（Dr. Karma Phuntsho）、オックスフォード大学で学位を得たチベット学者であると同時に、社会活動家である。既に日本の学会で講演し（スピリチュアルケア学会、2017年7月）。なお、筆者の本務校で集中講義を担当してもらう予定であったが（京都大学教育学部、2019年冬学期集中講義）、新型コロナウイルスのため急遽取りやめとなってしまった。とはいえ、カルマ博士をはじめ、ローデンのスタッフとは、深い信頼関係で結ばれている。

その他、ブータン調査を毎年継続する中で、NPO以外でも、多くの方々と深い信頼関係を得るに至った。例えば、大学としては、RTC（ロイヤル・ティンブー・カレッジ）と深いつながりができ、前学長T・ポーデル博士（前教育大臣）とは極めて親しく、全面的な協力を得ることができる。僧院としては、Dechen Phodrangの学院長Rinchen Choezang師と親しく、僧院教育の調査が可能である。また、kila Gempa学院とも親しく、全面的な協力を得ることができる。ロイヤルファミリーとしては、ケサン王妃（Ashi Kesang Choden Tashi Wangchuck）と親しくさせていただき、文化保護活動について貴重な話を聴かせていただくことができる。先に見た、NPO「ローデン」に関しては、カルマ博士（Dr. Karma Phuntsho）のほか、ディレクターのブンツォ・ナムゲイ（Phuntsho Namgye）氏、文化保護部門のサムテン・イシェ（Samten Yeshey）氏と親しく、全面的な協力を得ることができる。さらには、一つの家とも極めて親しい関係にあり、多くの情報をここから得ている。

以上は、「ケアとスピリチュアリティ」の研究から派生した幸運であり、今後の研究に、きわめて大きな財産である。

ちなみに、継続研究として、基盤研究(C)「ブータン社会における次世代支援とモラル育成 - サステナビリティとスピリチュアリティ」(2020.4月1日 - 2025.3月31日)が許可され、ブータン研究を継続してゆく予定である。

ところで、ブータン調査の中で、思想研究としての「転生」の視点が重要な課題として浮かび上がってきた。私の転生理解は、ブータンと出会うことによって新たなステージに移った。転生を基盤とした社会という視点が加わり、転生を生きる人々の日常生活実感に焦点が絞られてきたのである。

ブータンの社会の根底には、転生の人生観が流れている。教義の話ではない。知的な理解でもない。その共同体で生きるためには当然のこととして皆に共有されている「常識 common sense」。それは、その共同体の内部に生きる者にとっては、あまりに当然すぎるから、意識されない。あるいは、立ちどまって問い直すと説明できなかつたり、整合性に欠けたりするのだが、日々の会話の中では当然のように前提となっているコスモロジー。コモンセンスとして共有されている転生の感覚。

それは、おそらく宗教上の信仰というより、母語の文法に近い。例えば、ゾンカ語それ自体が、

既に円環的ライフサイクルを前提にして成り立っており、ゾンカ語という言語共同体に属する限り（意識するしないにかかわらず）そのコスモロジーを共有する。そうした意味において、ブータンの人々は「輪廻を信じている」のではなく、「輪廻を生きている」のではないか。

「ケアとスピリチュアリティ」の研究は、こうしたコスモロジーの位相を考慮する必要がある。その意味で、「転生」の視点に関する考察は、ブータン社会における「ケアとスピリチュアリティ」研究の土台を確認する作業であったことになる。なお、転生に関する研究報告を行い（Views of Reincarnation: the perspective of Bhutanese Youth, May, 8, 2017, Kyoto University）ブータン王妃来学の際には、これまでのブータン研究の一端を発表した（Fateful and Unexpected Encounters :Researching Bhutanese Youth, October, 25, 2017, Kyoto University）

### （3）理論研究としては、多方面にわたる成果を得た。

1、伝統思想における「ケア」と「霊性」を課題とした研究会を継続した。スクールカウンセラーの現場における「ケア」と「スピリチュアリティ」の関連など、興味深い課題を検討した。また、スピリチュアルケア学会においては、日本の稽古の伝統から見た「スピリチュアリティ」についてシンポジウムで報告し、様々な視点との交流をとして議論を深めた。また、『スピリチュアルケア学会誌』に「ケア論から見たスピリチュアルケア」を寄稿した。

なお、スピリチュアルケア学会の学会大会長を務め、大会長講演を行い（「スピリチュアルケアへの敬意」、2017年9月10日、京都文教大学）記念シンポジウムの企画・司会を担当した。

2、ケアとスピリチュアリティ研究の思想的基盤として、西田哲学、井筒哲学の基礎研究を継続した（例えば、論文「西田哲学と『大乘起信論』 - 井筒俊彦『意識の形而上学』を介して」上・中・下、『思想』1108号、1110号、1113号など）

また、日本の伝統思想を通して「スピリチュアルケア」の理論的整理を行い、海外の研究者との共同研究を行った。例えば、パリ大学におけるシンポジウム（‘No-Mind’ and ‘No-Body’: Consciousness and the Body from a Japanese Philosophical Perspective, 1er Semaine Internationale du Corps, ‘Living body experience’, Université Paris-Descartes, June 29, 2016）ドルトムント工科大学におけるシンポジウム（Amae: one aspect of ‘I and you’ in Japanese Culture, ‘Japanese-ness’ in Transculturality: Family, Education and Society, TU Dortmund、ドイツ・ドルトムント工科大学、心理・教育・社会学部、2019年3月1日）などである。

3、「無心とケア」という課題のもと、「稽古」「無心」「修養」など日本の伝統思想の研究を継続した（例えば、「日本文化の中のマインドフルネス」（同志社大学 Well-being 研究センター、2018年3月29日、同志社大学）海外の研究者との共同研究の機会も多い（例えば、「keiko 稽古 and Shuyo 修養 self-cultivation in Japanese Philosophy」The Anthropology of Japan in Japan(AJJ), Ways of Becoming: the Anthropology of Education, Anthropology and Education & Anthropology in Education, 同志社大学、2017年、12月10日）

4、ケアに関する論文集をまとめた（西平直・中川吉晴共編著『ケアの根源を求めて』晃洋書房、2017年）ケアとスピリチュアリティ研究を、ケアの視点から、掘り下げた共同研究である。

5、精神分析に関する対談を発表した（西平直・松木邦裕『無心の対話 精神分析フィロソフィア』創元社、2017年）この研究は、聞き取り調査における「転移/逆転移」の問題と重なる仕方、研究方法論の基礎研究となった。

6、ライフサイクル研究の領域でこれまでの考察をまとめた（西平直『ライフサイクルの哲学』東京大学出版会、2019年）先に見た「転生」の視点も含め、ライフサイクル（人生・生涯）を多層的に見る研究である。ケア研究もスピリチュアリティ研究も、実は、具体的には、ライフサイクル研究と密接に関連する。正確には、筆者の研究は、常に、ライフサイクルにおける生成・変化を基礎とする。その意味において、研究の土台を整理した著作である。

7、「ケアとスピリチュアリティ」の思想的基盤として、「稽古」「無心」「修養」など日本の伝統思想の研究を継続した。その成果は、『稽古の思想』（春秋社、2019年）『修養の思想』（春秋社、2020年）と発表されたが、現在（報告書執筆時）「養生」に視点を移して継続中である。

### （4）今後の研究との関連について

先にも見た通り、本研究は、次の科研費研究へと引き継がれてゆく。その視点から本研究で得た「課題」を明確にしておく。

「ケアとスピリチュアリティ」をめぐる、ブータン社会を調査する中で、伝統的なブータン社会においては、欲望の拡大を「抑制する」知恵が働いていたのではないかという仮説を得た。言

い換えれば、伝統的なブータンの社会は「欲望を肥大化させない」ことを社会の基本原理としていたのではないかという仮説である。

$$\frac{\text{現在の所有(財・能力・地位)}}{\text{欲望}} = \text{分母に「欲望」を置き、分子に「現在の所有(財・能力・地位など)」を置く。分母が小さければ、分子が小さくても、満足度は高いことになる。}$$

例えば「無欲の幸せ」と呼ばれるこの知恵は、日本でも「知足(吾・唯・足・知)」などの言葉と共に共有されていた。ブータンでは、その知恵がGNH (Gross National Happiness)として引き継がれている。具体的には、「このままでいい」、「なくても幸せ」などと語られる。

では、この知恵は、若者たちに「我慢」を強いるのか。大人から強制されるのか、それとも、若者たちが、自ら、それを望むのか。それとも、欲望を「抑える」のではなく、欲望を「上手に扱う・上手に生かす」という知恵であるのか。

更には、「これ以上発展しない方がいい」というブータンの若者たちの発言をどう理解するか。欲望が拡大しなければ人も社会も発展しないのではないか。その点について、彼らはどう考えているのか。あるいは、彼らは、その社会のコスモのジーンの中で、「欲望のままに生きても幸せにならない」と理解しているのか。

こうした問いを、「ケアとスピリチュアリティ」研究の中で確認するとともに、次の研究に引き継いでゆくことにする。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計13件（うち査読付論文 5件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 西平直	4. 巻 2
2. 論文標題 ケア論から見たスピリチュアルケア	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『スピリチュアルケア研究』	6. 最初と最後の頁 1-13頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 西平直	4. 巻 26
2. 論文標題 ルターの信仰義認と西田哲学「逆対応」の論理 - E.H. エリクソン『青年ルター』を手掛かりとして	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 『近代教育フォーラム』教育思想史学会	6. 最初と最後の頁 69 - 77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西平直	4. 巻 35 - 1
2. 論文標題 源流 Urquelleを求めて	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 『人間性心理学研究』	6. 最初と最後の頁 101 - 107
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西平直	4. 巻 1108
2. 論文標題 西田哲学と『大乘起信論』 井筒俊彦『意識の形而上学』を介して（上）	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 思想	6. 最初と最後の頁 97 - 116
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 西平 直	4. 巻 1110
2. 論文標題 西田哲学と『大乘起信論』 井筒俊彦『意識の形而上学』を介して(中)	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 思想	6. 最初と最後の頁 90 - 111
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 西平 直	4. 巻 1113
2. 論文標題 西田哲学と『大乘起信論』 井筒俊彦『意識の形而上学』を介して(下)	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 思想	6. 最初と最後の頁 103 - 123
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Nishihira, Tadashi	4. 巻 1 - 2017
2. 論文標題 Bewusstsein ohne Bewusstsein (Mushin): Die Zen-Philosophie aus erziehungswissenschaftlicher Sicht	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Paedagogische Rundschau	6. 最初と最後の頁 33 - 50
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Nishihira, Tadashi	4. 巻 電子ジャーナル
2. 論文標題 'Preparation' for Creative Inspiration; from the teaching of Japanese classical 'Keiko; exercise and expertise'	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Journal of Integrated Creative Studies (電子ジャーナル)	6. 最初と最後の頁 1 - 12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 西平 直	4. 巻 1099
2. 論文標題 「西田哲学と「事事無礙」 - 井筒俊彦の華嚴哲学理解を介して」	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 『思想』	6. 最初と最後の頁 27 - 51
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西平 直	4. 巻 694
2. 論文標題 「「ジェネレイショナル・ケア」の危機と「不生」のゼロポイント - 教育・臨床・哲学のフィールド」	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 『理想』	6. 最初と最後の頁 2 - 12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西平 直	4. 巻 4
2. 論文標題 「無心のケアのために - 断片ノート」	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 『心身変容技法研究』	6. 最初と最後の頁 72 - 81
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西平 直	4. 巻 112
2. 論文標題 「ブータンの現在、あるいは、ブータンという物語」	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 『教育哲学研究』	6. 最初と最後の頁 205 - 229
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -



1. 著者名 Nishihira, Tadashi	4. 巻 電子ジャーナル1号
2. 論文標題 Subjectivity of 'Mu-shin' (No-mind-ness): Zen Philosophy as interpreted by Toshihiko Izutsu	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 International Center for Integrated Creative Studies 電子ジャーナル	6. 最初と最後の頁 電子ジャーナル
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計14件 (うち招待講演 12件 / うち国際学会 6件)

1. 発表者名 西平直、松木邦裕
2. 発表標題 「無心のダイナミズム」(松木邦裕氏との対談)
3. 学会等名 日本精神分析学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 西平直
2. 発表標題 「スピリチュアルケアへの敬意」
3. 学会等名 スピリチュアルケア学会、大会長講演(招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Nishihira, Tadashi
2. 発表標題 keiko稽古and Shuyo修養 self-cultivation in Japanese Philosophy」
3. 学会等名 The Anthropology of Japan in Japan(AJJ) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 西平直
2. 発表標題 「分節と無分節の同時現成 - 井筒俊彦「禅哲学」における「二重写し」について」
3. 学会等名 井筒・東洋哲学の展開に関する比較宗教学的検討、第一回研究フォーラム（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 西平直
2. 発表標題 「うまくゆく時・ゆかぬ時 - 個の修正と関係の修正」、
3. 学会等名 日本共創学会「共創と障害」（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Nishihira, Tadashi
2. 発表標題 No-mind and no-body: Toward the whole energy of the Field of no-mind and no-body
3. 学会等名 International & Transdisciplinary Symposium on Advaced Future Studies（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Nishihira, Tadashi
2. 発表標題 ‘No-Mind’ and ‘No-Body’: Consciousness and the Body from a Japanese Philosophical Perspective
3. 学会等名 1er Semaine Internationale du Corps, ‘Living body experience’, Universite; Paris-Descartes（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Nishihira, Tadashi
2. 発表標題 Young generation in the rapid social change of modern Bhutan: life course, life cycle and a perception of 'reincarnation'
3. 学会等名 International Symposium, Emerging Sciences for Wildlife and Culture in Bhutan, (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 西平 直
2. 発表標題 ルターの信仰義認を西田哲学の「逆対応」で読む
3. 学会等名 教育思想史学会「シンポジウム・教育と宗教 信仰と生の本来態」(招待講演)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 西平 直
2. 発表標題 無心に耳を傾ける
3. 学会等名 スピリチュアルケア学会「シンポジウム・様々な人間観からスピリチュアルケアを照らす」(招待講演)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 西平 直
2. 発表標題 井筒俊彦の「東洋哲学」について
3. 学会等名 台湾大学日本研究センター・国際シンポジウム「近代日本哲学と東アジア」(招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 西平 直
2. 発表標題 生まれてきた幸せ・生まれてこなかった幸せ いのちを育てるということ
3. 学会等名 現代における宗教の役割研究会（第63回、コルモス研究会議）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Nishihira, Tadashi
2. 発表標題 "No-Mind" and the Body: Taking a Hint from the Later Philosophy of Nishida Kitaro'
3. 学会等名 Beyond the Extended Mind; Kyoto Conference 2015（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 西平 直
2. 発表標題 「輪廻のコスモロジーとブータンの新しい世界
3. 学会等名 ブータン文化講座、京都大学こころの未来研究センター、（招待講演）
4. 発表年 2015年

〔図書〕 計7件

1. 著者名 西平直	4. 発行年 2019年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 357
3. 書名 ライフサイクルの哲学	

1. 著者名 西平直	4. 発行年 2019年
2. 出版社 春秋社	5. 総ページ数 181
3. 書名 稽古の思想	

1. 著者名 西平 直・中川吉晴共編著	4. 発行年 2017年
2. 出版社 晃洋書房	5. 総ページ数 275頁
3. 書名 『ケアの根源を求めて』	

1. 著者名 西平 直・松木邦裕	4. 発行年 2017年
2. 出版社 創元社	5. 総ページ数 151頁
3. 書名 『無心の対話 精神分析フィロソフィア』	

1. 著者名 矢野智司・西平直共編著	4. 発行年 2017年
2. 出版社 協同出版	5. 総ページ数 238頁
3. 書名 『新・教職教養シリーズ・第3巻 臨床教育学』	

1. 著者名 矢野智司・西平直編	4. 発行年 2017年
2. 出版社 協同出版	5. 総ページ数 280
3. 書名 『新・教職教養シリーズ・第3巻 臨床教育学』	

1. 著者名 西平 直	4. 発行年 2015年
2. 出版社 みすず書房	5. 総ページ数 264頁
3. 書名 『誕生のインファンティア - 生まれてきた不思議・死んでゆく不思議・生まれてこなかった不思議』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>『修養の思想』（春秋社、2020年）が、2020年4月に出版されました。  前著『稽古の思想』（春秋社、2019年）の姉妹編に当たり、ケアとスピリチュアリティのテーマを、日本の思想の中で検討し直す中で成立した研究です。</p>
--

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考